



# バッハの森通信

第 162 号  
2024 年  
1 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : [info@bach.or.jp](mailto:info@bach.or.jp)

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

## 必死に生きよう

### 平穏な日常が突然消えたとき

バッハの森の年賀状に新年の御挨拶を綴り、そこに「ハレルヤ、主に感謝せよ、その慈しみは永遠なれば。ハレルヤ」と記した去年の年末に、ウクライナやガザの戦乱も、世界各地で起こった、地球温暖化を原因とする大洪水、大干魃も、アイスランドの都市の真ん中で噴出した火山のマグマについても、何と恐ろしいことが起きているのかと被災者たちのことを思い、心を痛めました。正直に告白すると、それに比べて私たち日本人の暮らしは何と平穏なことか、とこれらの災害を“対岸の火事”と見なしていました。

それが、正月元旦の能登半島大地震、2 日の羽田空港の重大事故と立て続けに起きた大災害によって、私たちの平穏な生活は一瞬で崩れ去る、全く脆弱な土台の上に営まれていることを思い知らされたのは、私だけでしょうか。

\* \* \*

「ハレルヤ、主に感謝せよ、その慈しみは永遠なれば。ハレルヤ」と、新年の祝辞に書き添えたとき、現在私たちが享受している平穏な日々が、新しい年にも続くように、という願いを籠めていたことは間違いありませんし、皆様もそのように理解して下さったのではないのでしょうか。

しかし、主に感謝を捧げよ、と歌った詩篇 106 篇の詩人は、決して平穏な日々感謝して「ハレルヤ」と歌ったものではありませんでした。詩篇はこの後、エジプト脱出直後から、士師時代、王国時代、そしてバビロン捕囚時代まで、契約を結んだ神に背いた先祖が、神の怒りを

かい、諸々の敵の圧迫に苦しめられて救いの叫び声を上げると、その都度、彼らを憐れんで救い出してくれた神の慈しみの歴史をえんえんと語り、最後に「主よ、私たちをお救いください。そして諸国の中から集めてください」と祈ります。この詩人が、バビロンに捕囚されていた人か、その後、諸国に四散した「離散のユダヤ人」(ディアスポラ)の一人なのか定かではありませんが、異国で苦しみながら、祖国への帰還を願っていた人であることが想定されます。

ですから、「主に感謝せよ、その慈しみは永遠なれば」と語ったとき、この詩人が、平穏な日々感謝して神の慈しみを称えたわけでないことは確かです。これは、罪を犯して罰を受けた先祖を憐れみ、歴史を通じて示された神の“慈しみ”による救いを、今、苦難のただ中にいる自分にも与えてください、という願いなのです。

\* \* \*

「主に感謝せよ」という箇所原語ヘブライ語は、間違いなく「感謝する」の 2 人称複数命令形で、各国語とも“Give thanks”、或いは“Danket”と翻訳します。ところがラテン語訳は、「感謝する」の一般的用語“gratia”(グラツィア)ではなく“confiteor”の変化形になっています。そこで辞書を引いてみると、「真実と認めて感謝する、信仰告白をする」というような訳語がついているので、ラテン語訳は、詩篇 106 篇の文脈に沿って解釈した訳語を選んだことが分かります。

主の慈しみ、信仰告白というような宗教的概念は分かりにくいかもしれませんが。そこで、より一般的な例をあげれば、能登半島大地震のような災害に被災して日常の平穏な生活が一瞬にして消失したとき、あなたはどのように生きる希望を取り戻しますか。現に能登地域の被災者の皆さんは、必死に命をつないでおられます。そうです、必死に命をつないでいれば、希望が見えてくるはずですよ。

(石田友雄)

## 人類が生き残るために

### 天の王国を地上に建設するため命をかけた人がいたことを思い出そう

\*このメディタツィオは、2023年12月10日に開かれた「クリスマス・コンサート」で朗読された原稿を少々修正した文章です。

#### 新しい意味がつけられた冬至祭

12月25日が、イエス・キリストの降誕を記念する祝祭日、クリスマスとして広く祝われるようになったのは、4世紀頃からです。本来、12月25日は、一年で昼間が最も短い日を境に、衰えた太陽が再び輝き出す「冬至祭」として、不滅の太陽神の顕現、誕生を称えるローマ帝国の祝祭日でした。ところがローマ帝国各地に広がっていたキリスト教徒たちが、これを正義の太陽であるキリスト誕生の日として祝うようになったのがクリスマスの始まりです。それ以来今日まで、クリスマスは、西欧諸国とその影響下の地方では、ツリーを飾ったり、子どもたちにサンタクロースがプレゼントを配ったりする楽しいお祭りとして、12月25日にお祝いされてきました。

#### マタイとルカの降誕物語

それでは、マタイによる福音書とルカによる福音書が詳しく伝えるイエス・キリスト降誕の物語は何であったのでしょうか。そもそもこの両福音書の降誕物語は、全く違う状況を伝えていて、これを一つの物語にまとめることはできません。例えばルカによると、イエスの母マリアとその許婚ヨセフはガリラヤのナザレから、戸籍登録をするためにユダヤのベツレヘムに旅をして、そこでマリアはイエスを生みました。他方、マタイでは、ベツレヘムに住んでいたヨセフとマリアは、ヘロデ王の幼児虐殺を避け、幼児イエスを連れてエジプトへ逃避し、ヘロデの死後故郷に戻りますが、ヘロデの息子が支配しているユダヤを避け、ガリラヤに行つてナザレに住み着きました。

#### 各地で発生した独自の伝承

ルカでは子どもを生んだ女の清めの日々40日が過

ぎたときに、両親は幼児イエスを献げるためエルサレム神殿に詣でますが、マタイでは、彼らはヘロデ王の死後までエジプトに逃げていました。

このように全く違う降誕物語が新約聖書に伝えられているのは、イエスが十字架にかけられて処刑された後、突然目が覚めた弟子たちが、彼こそ、先祖に約束されていた「メシア」、すなわち、当時、この地方の国際共通語ギリシャ語で「キリスト」であったと悟り、熱心に伝道を始めて各地にイエスをキリストと信じる人々を集め、それぞれのグループがイエスの教えや行動を語り伝えた結果であったと考えられます。彼らは、まだ教会という統一された宗教団体ではありませんでしたから、各地で自由に自分の信じることを活発に伝えていた結果、百年近い歳月の間に、それぞれ独自の伝承を生み出したのでしょう。これらの降誕物語は、象徴的な表現によってイエスがメシアであることを示す興味深い伝承ですが、本日はその解説は割愛します。

#### 共通する二つのテーマ

今、私たちは、全く内容が異なるマタイとルカの降誕物語に共通する重要なテーマが二つあることに注目します。その一つは、イエスはダビデ大王の出身地、ベツレヘムで生まれたという報告です。これは、ダビデ王家の子孫からメシアが生まれるという聖書の預言に従ってイエスが生まれたことを示しているのです。イエスの最初の弟子たちは、ナザレのイエスがメシアであることを、聖書が預言していると信じ、イエスを「ダビデの子」、即ち「ダビデの子孫」と呼びました。

次に、マタイとルカの降誕物語に共通する第二の重要なテーマは、イエスはこの世の人ではない、天の王国から来た人だと考えなければ、彼の教えと行動が説明できないと彼らが考え出したことから始まりました。このことを、イエスは処女マリアが聖霊によって身籠もった子であると、ルカは天使がマリアにマタイはヨセフに告げたと伝えます。

#### 天の王国の倫理

イエスは「天の父が慈しみ深いように、お前たちも慈しみ深い者になれ」、或いは「天の父が完全であるように、お前たちも完全な者になれ」と教えました。これは、お前たちは神のようになれ、という教えなのでしょう。菅原道真を学問の神、天満天神として拝み、徳川家康を

東照大権現として日光東照宮に祭る日本人には、それほど驚くほどの教えではないかもしれません。しかし、神は創造者、人間は被造物と、神と人間をはっきり区別するヘブライズムの世界では、許しがたい発言と考えられました。

イエスが弟子たちに教えた「主の祈り」で、「あなたの王国が来ますように」、「あなたのお考えが天におけるように地上でも行われますように」と天の父に祈れと教えました。彼が天の王国をそのまま地上に実現することを目指していたことは明らかです。結局、これらの発言は神の冒涇とみなされ、イエスは死刑にされたのです。

キリスト教徒は、早くからイエスを父なる神の独り子と呼ぶようになりましたが、それは天満天神や東照大権現のようにイエスを神に祭り上げたことを意味しているわけではありません。天満天神や東照大権現は、御利益を祈願する人々が神々に祭り上げた偉人たちでしたが、父なる神の独り子とは、イエスが父なる神と同じことを考え、同じことをする方だということを意味しているのです。だから、天の父のように慈しみ深く、天の父のように完全であれと、イエスは教えました。実際、天の父のように慈しみ深く、完全な者になれという教えは、「敵を愛せ」という教えの結論として新約聖書に記録されています。従って、この教えは、地上では通用しない天の王国の倫理と呼ぶべきでしょう。

### 求められる発想の転換

2023年の年末を迎え、クリスマスを楽しめる人は世界中に何人いるのでしょうか。日に日に短くなる日の光とともに世界はただただ暗くなっていくように見えるからです。ロシア人とウクライナ人の戦いもイスラエルとハマスの戦いも、それ自体は局地戦なのに、全世界を巻き込んで終わりが見えない泥沼の様相を呈しています。私たちが住む世界は、良くも悪くもグローバルなのです。コロナというパンデミックが証明したとおりです。それなのに、世界中の国々が自衛と称して来年の軍備に莫大な予算を計上していることを知ると、何と人間は愚かな生き物なのかと思えます。核兵器による戦争を始めたら、人類が自滅することが分からないのでしょうか。

他方、この一年、全地球の温暖化による異常気候によって大干魃と大洪水が世界各地を襲い、インフラを整備できない貧しい地域の多数の人々は故郷に住めなくなり、難民になって彷徨しています。このことだけでも大

問題ですが、先進国の人々が自分たちは当分大丈夫だと思っているなら、余りにも無知と言わざるをえません。このまま温暖化が進めば、近い将来、人類は絶滅危惧種になり、ついには誰も地球に住めなくなる日はそれほど遠い未来のことではなくなるという危機感は徐々に広まっています。

言うまでもなく、温暖化を止める方策を科学的に探し求めなければなりません。しかし、先日の COP のような国際会議でも、相変わらず先進国と途上国の利害が衝突して有効な手段の実現の合意を導き出せませんでした。このような状況を解決するためには発想の転換が必要ではないでしょうか。すなわち、人類が生き残るためには、これまで強い者勝ちが唯一のルールだった地上では、絶対に通用しないと考えられてきた「天の王国の倫理」で生きる道を探すことです。その第一歩は、2000年前に「天の王国の倫理」を教え、天の王国を地上に建設しようと命がけで活動した人がいたことを思い出すことではないでしょうか。

(石田友雄)



## 心に迫った「天使の讃美」

### 第7回・朝のオルガン音楽鑑賞会

2023年11月10日

奏楽堂に響き渡るバッハのオルガン曲「いと高きところにあります御神にのみ栄光があるように」(BWV 662, 663, 664)とそれに先立つコラールのソプラノ・ソロが、聴く者に天上の世界と人間界を橋渡ししているように思えました。

プログラムは、最初、石田友雄先生の解説により、コラール「いと高きところにあります御神にのみ栄光があるように」は、イエス・キリストが降誕した夜、天使の大軍が現れて神を讃美した「天使の讃美」をもとに構成されたラテン語ミサ通常文「グローリア」のドイツ語パラフレーズであることが説明されました。訳者ニコラス・デチウスは、「グローリア」を単にドイツ語訳しただけではなく、ところどころ補足説明することによって、歌詞の意味を明らかにします。例えば、最初の言葉「グローリア」の意味は「栄光あれ」ですが、コラールは「今や、いかなる災いも決して私たちを襲うことができないゆえに」とその理由を説明します。聖書は神の救いの業が実行されたときに「神の栄光(グローリア)が現わされた」と語るのです。ここでは、言うまでもなく、イエス・キリストの降誕という救いの業によって神の栄光が現わされたのです。

プログラム後半は、このコラール全4節を参加者全員で斉唱して始まりました。そして「ライブツィヒ手稿譜コラール集」(18曲のコラール集)に収録されているこのコラールの3曲のオルガン編曲が、解説とソプラノ・ソロ付きで次々と演奏されました。第1編曲(BWV 662)は、ソプラノにコラール定旋律があり、三位一体の神を讃美するコラール第1節を思わせ、第2編曲(BWV 663)は、テノールに定旋律があり、父なる神と御子なる神をテーマとするコラール第2節と第3節を示し、トリオの第3編曲(BWV 664)は、バスに定旋律が置かれ、聖霊を語るコラール第4節を歌っています。

このようにソプラノ・ソロとオルガン編曲によって神の栄光が歌い上げられているのを聴きながら、「天使の讃美」、すなわち「グローリア(栄光)がいと高き御神にのみありますように、地には平和が御意志(ミココ)にかなう人々にありますように」の言葉がふくらみをもって迫ってくるのを感じることができました。

プログラムは最後に「前奏曲とフーガ ロ短調」(BWV 544)の演奏によって締めくくられ、豊かな気持ちで終

わることができました。オルガン演奏、ソプラノ・ソロ、解説をしてくださった先生方、ありがとうございました。

(宮治陽子)

## 心躍るコラール斉唱

### 互いに耳を傾け合って 成長したクワイア

#### クリスマス・コンサート

2023年12月10日

私の「バッハの森のクリスマス・コンサート」は、1992年から始まりました。当時、クワイアはなく、ハンドベルのメンバーとして参加させていただきました。あれから31年もたちますが、その頃からコンサートの基本的な流れは変わっていません。キリスト教会の礼拝形式に従って、ハンドベル、オルガン演奏、聖書朗読、宗教曲の斉唱と合唱、メディアタツィオで構成され、オルガンが全体の流れを一つにまとめています。

今回も鈴木由帆さんが、闇から光へと展開する流れのため、最初にJ.S. バッハ「いざ来たりたまえ、異邦人の救い主よ」“Nun komm, der Heiden Heiland”(BWV 659)、最後にJ. パッヘルベル「いと高きところにあります御神にのみ栄光あれ」“Allein Gott in der Höh sei Ehr”を選曲、演奏してくださり、この重要な役割を担ってくださいました。

この変わらない流れの中で、今も変わらず私の心が踊ってしまうのが「コラール斉唱」です。このところ、コラールが作詩された背景を調べる機会が多かったことも重なり、歌っていると一層の高揚感を実感することができます。コラールが作詞された時代の民衆が置かれていた状況、彼らの叫び、神に対する思いの丈が詰まったコラールを、友雄先生が忠実に分かり易く訳してくださっていますが、結局、聖書の言葉ですから、何年学んでも難解ですし、自分にとって異文化であることをしばしば思い知らされます。ため息が続くほど分からないことだらけなのに、歌うと心が踊ってしまう不思議は、一体何なのでしょう。こうして「分かった」と「分からない」を繰り返しながら31年間も歌い続けてきました。言わば中毒なのかもしれません。ただ「コラール斉唱」をするだけでも楽しくなりますが、コンサートの流れの中で、オルガンに合わせて斉唱すると喜びはひとしおです。

バッハの森クワイアについても少しお話ししたいと



思います。現在のクワイアは、1994 年春に開いた「カウンタータを歌う集い」が前身で、同年秋から毎週土曜日の練習が始まりました。最盛期は 20 人以上いたメンバーも近年は減り続け、現在は 10 人です。今回のクリスマス・コンサートは 9 人で歌いました。ここまで減ってしまうと、従来の歌い方では、各自の声が聞こえて言葉もバラバラになり、合唱としてのまとまりがなくなりがちですが、今回のメンバーは、練習中にも改善のアイデアが浮かべば「はい」と手を挙げて意見し、声や言葉の不揃いを修正しながら、自分たちでその困難を乗り越えてきました。ミサのラテン語も慣れたもので、年々言葉への理解度が深まっていることもあり、今回は、今までで一番良く表現できたのではないのでしょうか。平和を願わずにはいられない現今の世情にあって、互いの声に耳を傾け、智恵を出し合い、より良い状態を探ってきた現クワイアだからこそ歌えた歌だったと思います。いつも聴きにきてくださっている方や、裏方でコンサートを支えてくださっている方々からも「とても良かった」と言っていたら、嬉しく思いました。

こうして今年も皆様に見守られながら、クリスマス・コンサートを心温かく終えることができました。有り難うございました。新年早々、大地震、飛行機事故と災難が続き心が痛みますが、皆様一人一人が先ずは健康で安全にすごせますように祈ります。

“Dona nobis pacem” 「我らに平安を与えたまえ」。  
(比留間恵)

## ぬくもりに出会った感動

### クリスマスの音楽会 クリスマス祝会 2023 年 12 月 16 日

例年になく温かな冬の午後、クリスマスの飾りで華やぐバッハの森に、お客様が次々と集まってきました。小学校低学年のお子さんと一緒に家族連れが多く、あっという間に満席になりました。

今回のテーマは、「朗読と名画とクリスマス・キャロルでつづるクリスマス物語」。受胎告知、降誕、東方の三博士の礼拝など、クリスマスにまつわる場面を描いた名画をスライドで映しながら、お話と音楽で物語を進めていく会です。

私が初めてバッハの森を訪れた 20 余年前。その頃も子どもたちの声で賑わうクリスマスの季節でした。手作りの人形が映し出されたスライドで物語が上映され、日

頃のコンサートとはひと味違う「温もり」を感じるプログラムでした。中でも名画を映しながらクリスマス物語が進められていくプログラムはとても魅力的でした。数百年も前に描かれた名画の数々と、それを彩るクリスマスの音楽。その美しさと何とも言いようのない暖かな雰囲気は心を奪われました。

今回は、久しぶりにこのような名画をテーマに掲げて音楽会を進めていくことになりました。そしてお客様方により楽しんでいただくために、準備の時間を二つ設けました。

一つ目は名画の解説です。「クリスマスはサンタさんが来る日」という知識しか持たない子どもが大半であろうという推測を前提として、名画を映しながら「イエス様は馬小屋で生まれたんだよ」などと、クリスマスの本来のお話がすっと心に入ることを意識して解説しました。

二つ目は、演奏されるクリスマス・キャロルを皆で歌うために、事前にお客様に覚えておいていただくという試みです。イエス様が生まれた夜、野宿していた羊飼いたちに現れた天使の大軍が唱えた有名な「天使の讚美」をラテン語で練習しました。「グローリア・イン・エクセルシス・デオ」（いと高きところにいます御神に栄光あれ）。難易度の高い歌詞ですが、比留間恵さんが持ち前の明るさとテンションで、大人も子ども巻きこんで練習してくださったので、最後には皆さんが参加した楽しい歌声が奏楽堂に響き渡りました。

さて、準備が整ったらいよいよ「クリスマスの音楽会」の開幕です。会場は暗くなり、オルガンの厳かで美しい音色が日常から非日常の世界にみんなを誘います。物語の朗読に合わせて、それぞれの場面に相応しいキャロルを演奏する、ハンドベル、器楽・声楽アンサンブルが音楽によって盛り上げます。次々に映し出される名画を見ながら物語は進み、最後にお客様と一緒に全員でオルガン伴奏でキャロルを声高く歌い、温かな余韻を残しながら音楽会は幕を閉じました。

クリスマスの音楽会が終わり、お客様が帰られた後、その熱が冷めないままに、今度は会員たちによる「クリスマス祝会」がスタートしました。毎年恒例の楽しい行事ですが、今年はリードオルガンを囲んでみんなでキャロルを歌うという画期的なプログラムがありました。このオルガンは、故・石田一子先生が幼少期から親しんでこられた貴重な楽器で、今度修理して友雄先生からバッハの森に寄贈されたオルガンです。横田博子さんと當眞容子さんの伴奏で歌いながら、素朴で芯のある音色がキャロルを歌うのにぴったりだとしみじみ感動しました。

祝会が終わって数日後に、クリスマスの音楽会の申し

込み受付などを責任をもって果たしてくださった三縄啓子さんから、イヤープレートの写真をいただきました。クリスマスツリーが飾られた部屋で、膝に赤ちゃんを載せて鍵盤に向かうお母さんとその家族が描かれています。伴奏に合わせてキャロルを歌っているのでしょうか。クリスマスの温かい雰囲気が静かに伝わってきます。



20 余年前に出会ったバッハの森のクリスマス。そこには「ぬくもり」としか言いようのない温かさがありました。今回の「クリスマスの音楽会」と「祝会」は、この「ぬくもり」にもう一度出会える瞬間でした。声を合わせてキャロルを歌い、クリスマスをお祝いする。こうした時間を持つことの素晴らしさに改めて感謝する思いです。(別所香苗)

## クリスマスの喜びを目指して

### 5 人で協力して奏でたコンサート

#### バロック音楽のひととき

#### クリスマスの贈り物

2023 年 12 月 23 日

12 月 23 日（土）に、バッハの森の後援を受けて、つくばバロック音楽実行委員会主催のクリスマス・コンサートを開催いたしました。その後、石田友雄先生から「今回のコンサートをどのようにして造り出したのか、バッハの森通信に寄稿なさいませんか？」というお誘いをいただいたので、コンサート開催に至る経緯についてご報告してみようと思います。

この企画が持ち上がったのは昨夏の終わり頃です。もともと武澤泰子さんと坂口大介さんと私の 3 人の演奏会

を 11 月に石岡市で開くことが決まっており、その流れで「12 月にもできないかな」「クリスマス・コンサートなら会場はバッハの森記念演奏堂がいいね」「鈴木美紀子さん、鳥生真理絵さんにも声をかけてみようか」と話が進み、12 月 23 日という絶好の日に、皆さんの予定もバッハの森も空いていることが分かり、企画の具体化が始まりました。私たち 5 人はご近所同士なので練習にパッと集まることもできましたし、チラシ作り、つくば市教育委員会への後援依頼、宣伝、予約受付といった諸々の準備は、ラインのやり取りで分担を決めました。

私たち 5 人のうち、歌の鈴木美紀子さん、バロック・ヴァイオリンの鳥生真理絵さん、フラウト・トラヴェルソの武澤泰子さん、それにチェンバロの私、鴨川華子の 4 人は古楽奏者、サクソフォンの坂口大介さんだけがモダン楽器奏者です。ちなみに坂口さんはハーグ王立音楽院でサクソフォンの古楽奏法を学んだという異色の経歴の持ち主です。彼がバロック作品を吹くと、オーボエやツィンクに聴き違えそうになるから不思議です。しかも、ソプラノ、アルト、テナー、バリトンが可能なので、旋律から通奏低音までどの声部でも OK という大変有り難い演奏家なのです。

さて、ここからプログラム順に、選曲理由や演奏上、工夫した点などをご紹介します。まず会場がバッハの森ならば、ということで私が提案したのは、バッハのクリスマス・オラトリオ (BWV 248) 第 39 番のアリア「私の救い主よ」です。原曲の編成はソプラノ、エコー・ソプラノ、オーボエ、通奏低音ですが、演奏堂の 2 階からエコー (イエスの声) が降ってきたら素敵だろうと思ったのです。今回はオーボエをサクソフォンの、エコーをフルートに代えました。本番では冒頭にアカペラで「来たれ、インマヌエル」を歌い、エコー・アリアに繋がりました。

次の「カンタービレ・マ・ウン・ポコ・アダージョ」(BWV 1019a) は、ヴァイオリンとチェンバロのためのソナタ第 6 番の初期稿にある楽章で、後にカンタータ 120 番のソプラノ・アリアに転用された曲です。歌唱的な旋律が今回のプログラムによく馴染むのではないかと、鳥生さんが選曲しました。

第 4 曲目は「フルートとチェンバロのためのソナタ」(BWV 1030) を演奏しました。言わずと知れた名曲です。慈愛と光に満ちた第 2 楽章を、クリスマスの喜びを表現するつもりで演奏しました。

前半の終わりに演奏した、M. A. シャルパンティエの「器楽のためのノエル」6 曲は、フランスのクリスマス・キャロルを題材にした器楽曲集ですが、今回は内容を聴衆の皆さんに分かり易く伝えるために、1 曲ごとに鈴木さんが考えた文章を朗読するスタイルをとってみました

た。後半の最初の曲は、クリスマス・キャロルの中から  
トン・コープマンが編曲した4曲を、原語と日本語の歌  
詞で歌いました。

次に、坂口さんお勧めの曲、H. パーセルの「ソナタ」  
第5番を演奏しました。原曲は4声ですが、下2声をチェ  
ンバロが担当し、ヴァイオリン、サクソフォンの3声  
ソナタという体裁にしました。

更にクリスマス第3祝日のためのカンタータ「甘き慰  
め、わがイエスは来たる」(BWV 151) のアリアを演奏  
しました。この曲はA・B・Aのダ・カーポ形式で、  
A部はソプラノとフルートが優雅な旋律を歌い交わす牧  
歌的なト長調、B部はウォーキングベースで動く通奏低  
音に支えられたホ短調です。今回はサクソフォンの通奏  
低音をB部のみに入れて、A対Bの対比効果を狙いまし  
た。プログラムの最後は、カンタータ(BWV 208)より  
アリア「羊は安らかに草を食み」にしました。原曲の編  
成はソプラノ、リコーダー2本、通奏低音ですが、リコ  
ーダー・パートはフルートとヴァイオリン、通奏低音パ  
ートはサクソフォンとチェンバロの2人で演奏しました。  
クリスマスのために作曲された曲ではありませんが、喜  
ばしい雰囲気クリスマスにぴったりなので、プログラ  
ムの締めくくりに相応しかったと思います。

アンコールは、お客様と一緒に歌いたいと思い、「き  
よしこの夜」を選びました。このコンサートのために坂  
口さんが素敵な前奏・間奏・後奏を作曲してくださっ  
たので、一味違った「きよしこの夜」を楽しんでいただ  
きました。

私にとって2023年最後のコンサートがバッハの森だ  
ったことは、大変幸せなことでした。石田先生とバッハ  
の森のスタッフの方々、それに来場いただいた皆様に心  
より感謝申し上げます。2024年もこの温もりある奏楽  
堂で、学び、演奏できることを楽しみにしております。

(鴨川華子)



高きみ空より  
Vom Himmel hoch da komm ich her

1. た から き み そし ら よ り  
2. え から き み そし ら よ り  
3. そ はる き ば しゆ こ み れ な び そし る に ら お み あ よ と か ふ り め み れ  
4. よ はる き ば しゆ こ み れ な び そし る に ら お み あ よ と か ふ り め み れ

わ の こ こ こ に き た た る  
こ の ひ こ う に み た た る  
な や え み み ず よ わ り れ な う れ た る  
を え ず こ ひ み ず こ う よ わ り れ な う れ た る  
を え ず こ ひ み ず こ う よ わ り れ な う れ た る

よ ろ こ わ び の き し ら せ  
う ろ ち り か こ び し き の し み よ し ら こ め ら せ  
み ゆ ろ ち り か こ び し き の し み よ し ら こ め ら せ  
ゆ み ゆ ろ ち り か こ び し き の し み よ し ら こ め ら せ

う た い か ら た る た る た な め  
な が く と い よ あ の ま こ き き る び - た め  
す い と あ ま か る た こ き き る び - た な め  
す い と あ ま か る た こ き き る び - た め り  
す い と あ ま か る た こ き き る び - た め り

- 1. 高きみ空より  
我ここに来たる。  
喜びの知らせ  
歌い語るため。
- 2. 選ばれし処女  
この日生みたもう  
麗しきみ子は  
汝が喜びなり。
- 3. そは主なるみ神  
悩みより汝れを  
導き清める  
救いの君なり。
- 4. (14)喜びにあふれ  
絶えず我、歌う。  
ゆりかごの調べ  
いと甘き歌を。

歌詞：Martin Luther(1535)  
旋律：Martin Luther(1539)  
訳詞：石田 友雄(2018)



「東方三博士の礼拝」1488  
ドメニコ・ギルランダイオ  
サン・ピエール聖堂 (フランス)

## 日誌 (2023.10.1~12.31)

\*R: オンライン参加

- 10.4 漏水停止水道工事調査 東部設備工業。  
10.14 運営委員会 参加者5名 (R2)。  
10.21 準備会 「クリスマスの音楽会」 参加者4名。  
11.4 運営委員会 参加者5名 (R1)。  
11.7 訪問 トマス・クレッシ氏 (Thomas Cressy)  
日本におけるバッハ受容の研究。  
11.10 朝のオルガン音楽鑑賞会 参加者15名。  
11.15 漏水停止水道工事 柴木材、東部設備工業。  
11.25 クリスマス飾り付け 参加者4名。  
11.26~28,30 漏水停止水道工事 柴木材、東部設備工業。  
12.4 漏水停止水道工事 柴木材、東部設備工業。  
12.8 クリスマス飾り付け 参加者4名。  
12.10 灯油ヒーター工事 柴木材。  
クリスマス・コンサート 参加者27名。  
12.3 リードオルガン修理 日比野四郎氏。  
12.16 クリスマスの音楽会 参加者72名。  
クリスマス祝会 参加者22名。  
12.19 ベランダ修理工事 柴木材。  
12.23 バロック音楽のひとつき: クリスマスの贈り物  
(つくばバロック音楽実行委員会主催、  
バッハの森後援) 参加者55人。

### J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

#### コラール・カンタータ入門

- カンタータ: J. S. バッハ「私はあなたに呼びかけます、  
主イエス・キリストよ」(BWV 129)  
J. S. バッハ「装え、お愛する魂よ」(BWV 180)  
コラール: J. アグリコラ「われ呼ぶ、主イエスよ」  
J. フランク「装え、わが魂」  
10.14 オルガン: 並木聡子。参加者6名。  
10.28 オルガン: 當眞容子。参加者5名。  
11.11 オルガン: 安西文子。参加者7名。  
11.25 オルガン: 金谷尚美。参加者7名。

### 学習コース

- バッハの森クワイア 10.7/12名、10.14/9名、  
10.21/10名、10.28/8名、11.4/9名、  
11.11/9名、11.18/11名、11.25/11名、  
12.2/12名、12.9/11名、12.10/13名。

- オルガン音楽研究会 10.13/8名、10.27/7名。

- オルガン・クラブ 10.6/3名、10.20/4名、  
11.17/2名。

- 歴史書・聖書入門 10.7/5名、10.14/4名 (R1)、  
10.21/7名 (R1)、10.28/3名、11.4/6名

- (R2)、11.11/4名 (R1)、11.18/5名 (R1)、  
11.25/5名 (R1)。

- 器楽アンサンブル 10.14/2名、10.21/1名、  
11.18/2名、11.25/2名。

- 声楽アンサンブル 11.4/4名、11.25/4名。

- ハンドベル・クワイア 10.21/6名、11.4/6名、  
11.18/6名、12.2/7名。

- ハンドベル・リンガーズ 10.15/6名、10.21/6名、  
11.12/8名、12.3/7名、12.16/9名。

- オルガン・レッスン 10.27/2名。

- チェンバロ・レッスン 10.13/2名、10.27/2名、  
11.10/6名、11.24/4名。

#### オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習

- 10.5/2名、10.6/3名、10.7/1名、10.13/2名、  
10.14/1名、10.18/1名、10.20/3名、  
10.21/2名、10.26/2名、10.27/2名、  
10.28/1名、10.31/1名、11.1/1名、  
11.4/1名、11.7/2名、11.8/1名、11.9/1名、  
11.10/5名、11.11/1名、11.16/1名、  
11.18/1名、11.22/1名、11.24/4名、  
11.25/1名、11.30/2名、12.2/1名、  
12.4/1名、12.5/1名、12.6/1名、12.7/1名、  
12.9/1名、12.10/1名、12.14/2名、  
12.15/2名、12.16/4名、12.20/1名、  
12.21/12名。

### 寄付者芳名 (2023.10.1~12.31)

#### 一般寄付

下記の方々から計107,100円のご寄付をいただきました。  
比留間恵、つくばバロック音楽実行委員会。

#### 建物維持積立寄付

下記の方々から計34,000円のご寄付をいただきました。  
比留間伸行・恵、當眞容子、別所直樹・香苗、  
松下雅弘、杉田せつ子、海東俊恵、岩渕倫子、  
野末明子。

#### 地上権積立寄付

下記の方から計3,000円のご寄付をいただきました。  
中村東子。

#### オルガン修理積立寄付

下記の方から計2,000円のご寄付をいただきました。  
鳥塚由帆。